

アトラス 細胞診と病理診断

亀井敏昭, 谷山清己 編

＜書評者＞ 根本則道（日本大学教授・病理学）

このたび、亀井敏昭先生（山口県立総合医療センター）と谷山清己先生（呉医療センター・中国がんセンター）編集による『アトラス 細胞診と病理診断』が医学書院から刊行された。

改めてご紹介するまでもなく、両氏は病理学会ならびに臨床細胞学会において指導的な立場で活躍されている現役の病理医であり、細胞診と病理診断の実務においては豊富な経験と貴重な症例を沢山お持ちの、いわば細胞診と病理の鉄人である。

本書の特徴の1つは編者の豊富な人脈を駆使した90名にもものぼる実務家（病理医、臨床医、細胞検査士）による、総論（病理学的理解、検体採取と標本作製、スクリーニング、報告様式、周辺技術、精度管理、医療安全対策、医療倫理）と各論（婦人科、呼吸器、消化器、内分泌、泌尿器、体腔液、乳腺、中枢神経、血液・骨髄・リンパ節、骨・軟部）の執筆である。とりわけ総論の項においては、限られた紙数の中に極めて重要かつ基本的な事項が要領よくまとめら

れている。各論の項では、各領域において日常業務で遭遇する頻度の高いものは勿論のこと、比較的頻度は低いが鑑別診断として重要なものがほとんど網羅されている。執筆は個々の疾患ないし病態について、その定義・概念、頻度、臨床所見、細胞所見、組織所見が簡潔に解説されており、特徴的な細胞像と組織像が対をなして掲載されている。また、細胞像と組織像にはシェーマが付され、説明文を読んだだけでは理解に苦慮する初学者に対しての細やかな配慮がなされている。

なお、本書に掲載されている細胞像ならびに組織像は、アトラスの使命である教科書のかつ典型的であるとともに非常に美しく、編著者らの本アトラスに対する並々ならぬ情熱を感じる。各論に関しては基本的に1ページ（時に半ページ）で参考文献を含めすべての解説が完結するため、ページをめくる必要がなく非常に読みやすい体裁となっている。

さらに、本書のもう1つの特徴は、随所にTopicsがちりばめられ

ていることである。Topicsに取り上げられている内容に一定のテーマはないが、広範囲に及び、アトラスのページには盛り込めなかった事柄や新しい疾患概念、診断に役立つクルーなどが解説されている。

本書を通読して感じることは、何といっても読みやすいこと、アップデートな内容を含んでいること、さらに視覚素材としての細胞像ならびに組織像が適切であり、非常にきれいなことである。すでに実務に携わっている病理医ならびに細胞検査士にはもちろんのこと、日常診療において細胞診を取り扱う臨床医、細胞診専門医資格の取得をめざす医師、また細胞診に興味を持っている研修医ならびに医学生にとっても非常に使い勝手の良いアトラスである。

病理診断・細胞診断に関する知識の整理、日常の業務における知りたい事項や所見などを手短かに確認したいときにも頼りになる。自室の書架、医局図書室、研究室ならびに医療現場にはぜひとも備えることをお勧めする一書である。

●A4 頁200 2010年
定価10,500円
(本体10,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-00941-6]
医学書院刊